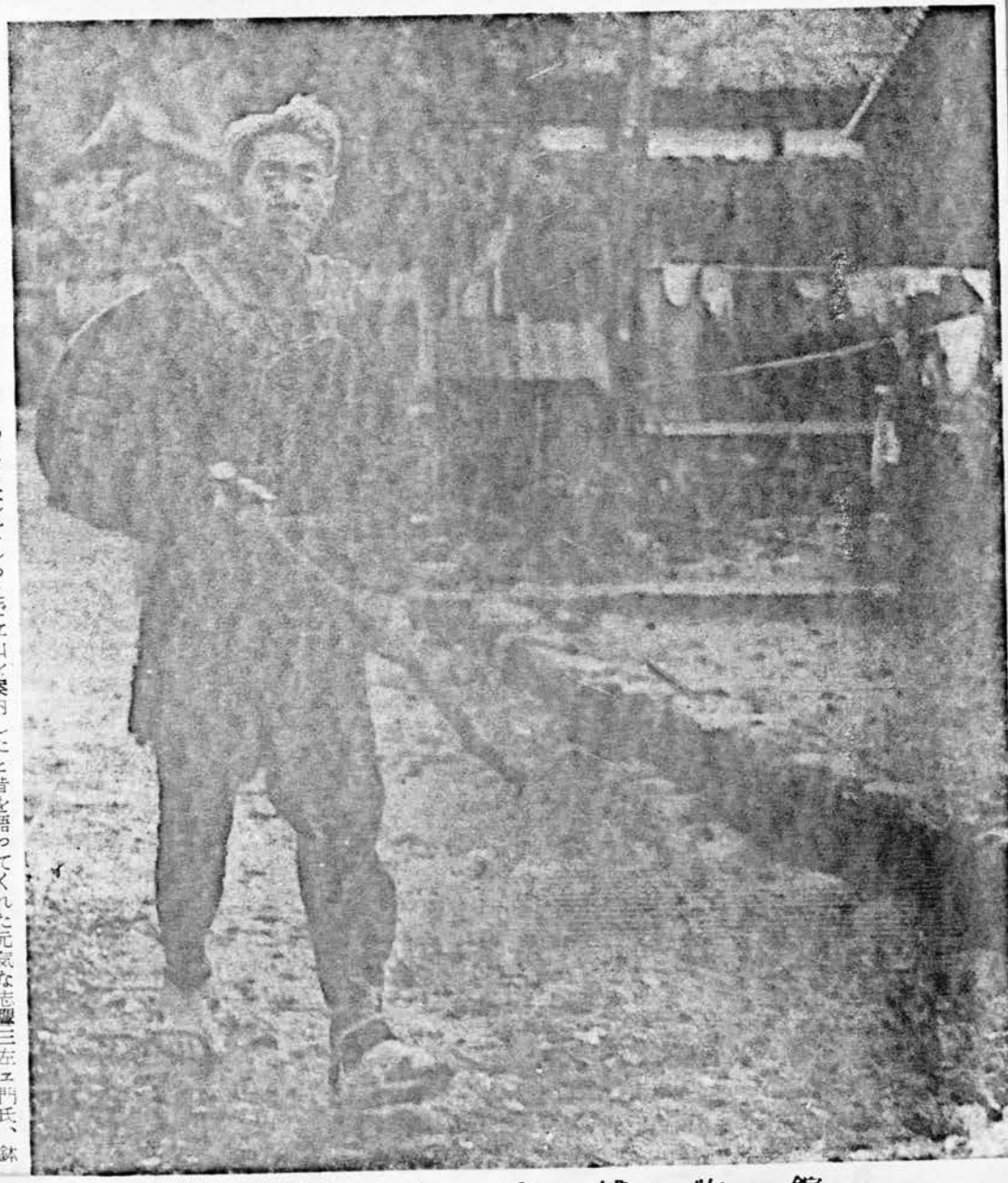
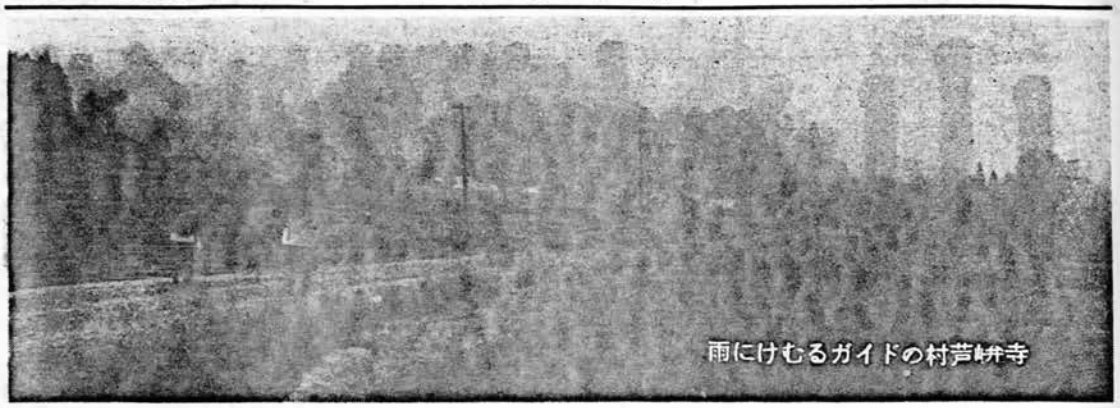
毎月1回20日発行　　昭和31年3月28日　第3種郵便物認可　①

山と博物館

第3巻　第7号　1958年7月20日



このような身ごしらえで立山を案内したと昔を語ってくれた元気な志鷹三左ェ門氏、鉢巻に草鞋、背にはドホ（背籠）を負い、笠をかけて手に持つ杖で流れや岩を飛び越す身軽さは、そのとき六十四才とは思えぬ若さにみなぎっていた。（本文二、三面）


雨にけむるガイドの村芦峠寺

信仰の山〝立山今昔〟

――芦(あし)くら寺(じ)をたずねて――

鈴木保二

バスやケーブルカーなど交通機関の発達により、忘れられて行く幾多の町や村がある。ここ、立山芦くら寺もその一つではないだろうか。

近代登山の発祥から、最近の大衆登山に至るまで、芦くら寺の登山界に残した足跡は大きい。明治後半から大正にかけて、わが国の信仰登山から近代登山への移りかわりに、登山界の先人たちを立山に案内したガイドの村がここであり、近くは南極探険に設営隊員として重任を果したのも、芦くらガイドの伝統を受けつぐこの村人だった。しかし、ここもまた、ケーブルカー、バスと登山交通の発展で、華々しく開けて行く立山のその麓に、訪れる人もなく、静かな生活を送っている。

私はこの村をたずねて、立山とともに生きて来た人々から立山の登山史を探ってみようとした。昔は女人禁制だったこの山に、女性として始めて登ったひとも現存していると聞いていたし、明治年間のガイドもいると聞いていたので、この旅は、私に、興味深いものがあった。

―立山と芦くら寺―

芦くら寺は、富山地方鉄道が立山の山間に入り、千垣(ちがき)駅に下車し、常願寺川右岸をだらだら登りに2キロほど登った渓谷中の台地にある村で、昭和29年私がちょうど探訪を試みた年に町村合併で立山町芦くら寺となったところである。

立山の開山は遠く奈良朝時代で、今から1、255年前に遡るといわれている。当時越中の国主であった佐伯宿称有若左衛門の嫡男、有頼は16才のとき、神のおしえにより白鷹を追って山に入り、立山を開いてその麓の芦くらに入寂したといわれている。

この佐伯有頼公の子孫が、代々この土地に住みついて雄山神社につかえ、社家となった。この社家は、明治のはじめまでは、全国から、年々数万人の登拝者があってその宿坊となった。今でもその神社の両脇には48坊が軒をならべており、当時の盛況をしのぶよすがとなっている。現在この芦くら寺180戸のうち、佐伯姓を名乗る者の多いのは、佐伯有頼以来のことである。また、この村には志鷹姓が多く、姓だけいったのでは誰のことかわからないので、土地では名前を呼びあっている。

志鷹は元はこの村の少し上方に先住していたのだが、大山崩れのために全部落の埋没にあい、たまたま生残っていた者がこの芦くらに移住して、その子孫も佐伯とともに雄山神社につかえて来たといわれている。このように芦くら寺は立山開山と同時に誕生して、それからの幾星霜、1、200余年を立山と盛衰をともにして来たのである。

―立山ガイドの生いたち―

今から380余年前、戦国時代の天正年間に立山の登拝者は15万数千人であったと、雄山神社の信者書上帳(現在の登山者名簿)に記載されているほどに、昔から信仰登山の盛りであった立山は、昭和になっても、金剛杖に白衣のお参衆(まいりんしゅう)で賑った。このお参衆の道案内として、芦くら寺から立山々頂の峰本社まで、道々説明をしながら登った案内人を仲語(ちゅうご)といって、当時100人の仲語がいたという。

この仲語が、明治末期の近代登山の黎明期に、山岳人を案内して立山や剣岳などの奥山に入り、明治のモダンな山岳人たちによってガイドと呼ばれるようになったのである。

今日ここでは案内人をガイドといい、人夫をポッカと

呼んでいる。老ガイドの志鷹三左衛門氏は、ガイドのプライドを、私に次のように語ってくれた。

「昔のお山登山は、室堂に一泊し、一ノ越の拭堂（はらどう）からいよいよ雄山に向うとき、仲語は足袋や草鞋を許されたが、人夫は履物を許されないので、雪渓やガレ径を素足で登ったものだ。」と……。

立山とならび立つ岩峰剣岳の初登攀は、明治44年であった。それは当時の陸軍参謀本部測量班員によって遂げられた。それはまた、芦くらの人夫徳助が、3尺に2寸の竹を山頂に立てたのであった。

明治から大正にかけて、日本の登山は、まだ探険の時代であった。そのころ、ここ剣岳は黒部の谷とともに、日本山岳会の先人たちによって開かれて行った。当時は猟師や漁師だけが奥山を知るばかりで、登山者はそれらの者に案内されてそこにわけ入ったのである。道はなくまして小屋など全くない奥山を踏みわけて登るには、日数が多くかかったので荷がかさみ、案内人や人夫を必要とした。この案内人、すなわちガイドが芦くら寺から出た「越中の衆」で、剣岳にある平蔵谷、長次郎谷などは彼ら名ガイドの当時の功績に因んで、地名として残された名前である。

―昔の立山登山―

昔から越中では≈男子16才にして立山に登らざるものは男に非ず≈といわれ、登らないうちは若い衆の仲間入りが禁じられていたのも、そう古いことではない。この地方ではまた、有頼16才の立山開山の伝説≈白龍黒熊≈は桃太郎か花吹爺ほどに、子供の頃から誰知らぬ者はない、といい、越中の人々にとって立山は、心のふるさととなって、根強く住みついて来たのだ。

一週間精進潔斎をした若者が、親類縁者に馬で送られ芦くらの坊に一泊して翌朝は未明にここを出発し、松明をかかげて仲語を先頭に、材木坂の急坂を、点々と灯をともして登っていったのである。そして雄山に登拝を済ませ無事を待ちわびる親類縁者に再び迎えられ、意気揚々と一人前の姿を馬上に揺られながら帰ったのである。

麓の草むらにある道標（上滝駅付近）

立山開山の佐伯有頼自作の木像のある雄山神社（芦くら寺にある）

しかし、このような当時の様子も現在では、わずかに富山市からの道々の賑やかな街中に忘れられたように立っている手引地蔵や、たびたびの道路改正で今はもう廃道にひとしい、里道の草むらにかくれている石の道標にしのぶよりほかはない。

この頃の立山は、神社に絶対の権限があって、特に室堂から上は、神主が先頭に立ち、越中一帯からえりすぐった屈強の若者の一人が饗銭担ぎ、次に神酒担ぎと青年の誇を肩ににになって先に立ち、一般の登拝者は自分の生れ在所の河原の小石を三個ふところにしてそれに続いた

旧暦の7月1日、お山開きから毎日の登山に、彼らは神主より一歩も先んじることが許されないばかりか、明治初年からは75銭の山銭をも払わなければならなかったという。

山銭は昭和になって50銭となり、さらに15年には10銭にまで値下げされたが、これは信仰登山から新興登山、すなわち近代登山への移りかわりを物語るものであろう。

この山銭は、室堂に備えられている鍋30個の使用料で、機械料と称して支払われたもので、この僅かな鍋を仲語たちが自分の客のために、先を争って奪いあう情景もみられたという。登拝者はふところに入れて来た三個の小石を、雄山々頂の峰本社に積み、祈願した。今でも山頂附近にはおびただしい積石がみられる。

そしてこの山の信仰登山は、明治後期から次第に近代登山が盛んになり、加えて、立山五色が原に源を発する常願寺川治水工事と、　それに伴う発電工事の軌道に便乗しうるようになってますます発展し、一般登山者は戦争までに全登山者の70％になった。戦時中は武運長久を祈る信者によって、一時は信仰登山の復活を思わせたこともあったが、戦争終了とともに全く後を断って終った。と、雄山神社の神主は語るのだった。

―立山伝説の芦くら寺―

立山を除く北アルプスの山々は、南は乗鞍岳から穂高

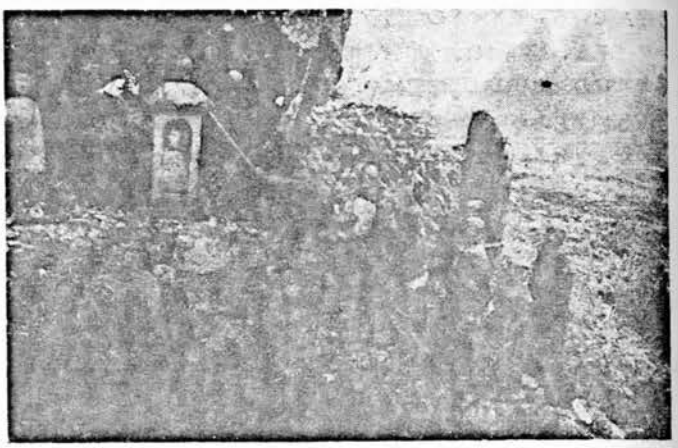
槍ケ岳、北端の白馬岳まで大方は山の姿にちなんで呼ばれ、その麓をとりまく里人から遠くながめ親しまれて来た。そしてなかには、農事などにむすびつき、里人の生活と関係して来た山もある。ところが古くから信仰のために登山されて来たこの立山の諸峰には、神仏に関係のある名前がつけられている。古くから登られ、人間に直接関係を持っていただけに、立山をとりまく里々には、白鷺の導きによって黒熊を追ったという開山伝説をはじめとして、数多くの語り伝えが残っている。

立山に黒百合の咲く伝説として有名なのは豊臣秀吉全盛のころ、越中城主佐々内蔵之介成政の愛妾早百合にまつわるものがあり、また成政のザラ峠越えは、冬期登山の史実としても有名である。

芦くらには七姫の伝説がある。南北朝のころ、越中にのがれて来た南朝の皇子を、時の城主は、美しい、武芸にもすぐれた七人の姫をえらんで、称名滝にほど近く屋敷をもうけてお守りした。この道はブナ坂を登る立山の本道を離れているので、しばらくは平和な世過ぎを送っていたが、いつか賊軍に知られて、弥陀原を迂回した賊のために上方から攻められ、皇子と五人の姫は討死した

そのなきがらは皇子塚として芦くらに葬られたが、残る二人の姫は尼になってその塚の近くに庵を結んで一生を皇子に仕えたといわれ、この塚の前方にある二つの小さな谷に、今も二人の庵の跡だといわれる地名が残されている。この皇子塚がいつとはなく庚申塚と呼ばれるようになったもので〝白き道 こよとしきりに 呼子鳥〟と士井晩翠の句碑が芦くらの村はずれ庚申塚のかたわらにさびしく立っている。これが藤橋から称名滝に向う道の途中にある七姫平の七姫伝説である。

ケーブルカーの終点美女平には、美事な立山杉が空高くそびえ、中には根か幹かわからないような不思議な杉も立っている。そのとき私は、ケーブルカーの架設工事中を見学も兼ねてこの附近を暮れ歩いたのであったが、梅雨どきの、雨のそぼ降るガス深い美女平は、伝説にうたわれるロマンチックな美女杉というよりも、むしろ不気味さをたゞよわせていた。



芦くら寺の村はずれにある七姫伝説の庚申塚

昔の登山者を案内した手引地蔵

女人禁制のころ、立山登拝に命を失った男を慕う美女が、ここまで登りついて神の怒りにふれ、この杉に化けたのだというのが美女杉の伝説である。

材木坂の急坂をもう一息で美女平というところに、きれいな清水が湧いて、かってそのかたわらに掛小屋があった。この小屋には、送り迎えの登山者にお茶を運ぶ美しい娘がいた。女人禁制のきびしい掟が解かれるとこの娘は立山に登山した。女性の初登頂者である彼女が、芦くらの近く上滝駅附近に住んでいるときいた私は、出来れば当時の模様を聞きたいと思って、彼女を訪れる決心をした。街道筋の格子づくりの家並の中を往きつもどりつしたり、村人とおぼしき道ゆく老人にたずねたりしたが一向に要領を得ない。探しあぐんだ果てに寺をたずねてようやくのことで彼女の住居をつきとめることができた。ところがいざたずねて見ると、昨年亡くなりましたということだった。何とも残念で直ぐには立ち去りかねていると、昔郵便配達をしたという古老にめぐり会ったもう80にもなろうというこの老人は盲も同然に視力を失い、その上耳も遠く、言葉も不明瞭でしかもなまりがあるので、きゝとるのに苦労したが、それでも昔の様子を知ることができたのは幸いであった。初登頂の女性にめぐり会えなかった失望はいく分いやされた。盲のこの老人は、昔は未明に芦くらを発って室堂までたっぷり一日がゝりだったのに、「今度材木坂にケーブルとかが出来るそうで、みんなお山まで日帰りが出来るとは有難いことだ……」と当時をしのぶかのように、盲いた目をお山の方へ向けるのであった。老人は信仰登山に生きたのだが、私には信仰登山の運命がこの老人に象徴されているように思えてならなかった。

（東京都渋谷区常盤松町30）

白馬にゆかりの深い植物

大町山岳博物館学芸委員　中　村　武　久

北アルプスの北端、白馬岳も再び夏の装いになり今夏も昨年におとらず登山者でにぎわうことだろう。

この白馬岳は古くから高山植物の宝庫として知られ、今では全山の植物が天然記念物となっている。白馬の植物研究の歴史は古く明治の中頃に始まったのは、本誌3巻5号に当時の草分けの一人である志村烏嶺氏が書かれている通りで、その植物の開拓は矢部吉禎先生に始まるといってよい。その后大正9年、小泉源一博士が白馬の植物の綜合的な調査を行い、その植物的意義は、日本の高山植物区域として最も優れ代表的なものであるとし、同11年10月全山の高山植物は天然記念物として指定されたのである。

以来なお学者の注目をあび、昭和3年7月指定地域内の高山植物の実態調査のため本田正次博士、竹中要博士のお2人が来られ、白馬の植物の全貌もやゝ明らかになった。そのご数多くの学者、研究家がおとずれ、近年、特に体系立った研究は行われていないが、高山植物の権威武田博士、田辺和雄先生、またコケ類の高木典雄氏等、白馬植物の研究の跡をたどって見ると枚挙にいとまない

さてこれ程長い研究の歴史をもつ白馬岳の植物、現在までに知られた200余種の高山植物は日本の高山植物の華といっても過言ではあるまい。もちろんこの中には他の高山に見られない珍稀なものも少なくないが、また白馬で始めて発見され命名されたもの（これを Type—基準標品という）の数はこれまた他に比類を見ないくらいである。夏の白馬に登り植物に親しまれる方のため、また存外知らないでいる地元の方々にも、この白馬岳にゆかりの深いタイプの種類のうち目に触れ易いものをひろい紹介しておきたい。

ジニウマナズナ

1　タカネヨモギ（一名シロウマヨモギ）

Artemisia sinanensis YABE

北アルプスの方々で見られる普通な種で、高山植物の図鑑にはおおかた載っているヨモギといっても普通平地に見るそれには余り似ていない。小さなガンクビ状の頭状花を下向きに沢山つけ、葉は非常に細かく切れる。まあ花の様子を見れば高山性ヨモギというところか……。これは1903年矢部吉禎氏が白馬のものをその基準種とし、シロウマヨモギと命名された（植物学雑誌17巻）

2　シロウマリンドウ

Gentiana Yabei TAKEDA et HARA

白馬特産種として最も代表的なもの、リンドウといっても花の色は紅紫でなく白で非常に変ったやつである。一時原博士はGentianellaという新属をつくったほどで、一見すぐ区別出来る種類である。これも最初矢部氏が白馬で発見し Gentiana detonsa var. albifloraという学名を与え前種同様1903年に発表されたもの、後、武田原両博士により、これは変種ではなく独立した種である事が確かめられ、矢部先生の功をたたえG. Yabeiとしてその学名を変えられた。リンドウ類中最も稀品なものの一つで、白馬ではそう多くはないが、山頂近くのお花畑中に時々見かける。

3　シロウマナズナ

Draba shiroumana MAKINO

ナズナの仲間は種類の区別が困難で、よく観察しないと間違え易い。特に葉の巾や形、及び果実や種子の形、性質に注意を要する。このシロウマナズナも同様よく注意して見ないと仲々わからない。他にミヤマナズナやクモマナズナがあるが非常によく似ている。もし花をつけていれば、花弁の先端が丸味を帯び凹んでいないし、また葉はやゝ細くふちの鋸歯は余りはげしくない。果実もミヤマナズナのそれに比べやゝ丸味をおび短かめである

これは1904年、先頃なくなった牧野富太郎先生が新種として発表されたもの（植雑18巻）で最近南アルプスにもあるといわれるが、矢張り白馬の特産の一つである。

4　タカネコウリンカ

Senecio Takedanus KITAG.

1910年武田久吉博士が白馬で発見せるものを植物学雑誌24巻に外国産の S. flammeus（焔紅色で葉に毛が沢山ある種で、朝鮮、満州、北支などに分布し本邦には産しない）の変りものとして発表された。後北村四郎博士が flammeus とは全く無関係であるとされ、変種ではなく種として学名を表記のごとく改正された。

本邦産のコウリンカによく似るが葉の両面に白い綿毛を被っているので容易に区別出来る。近来その産地は比較的広いことが知られているが、白馬では雪渓周辺から葱平辺りで見られる。

5 シロウマタンポポ

Taraxacum alpicola var. shiroumense KITAMURA

昭和7年頃から10年頃までの間、信州の畏小泉秀男氏が日本産タンポポの分類研究を行い、本邦産タンポポを実に200 種近く記載されたことがある。その一つにこの白馬産のシロウマタンポポがあり、ミヤマタンポポ（T alpicola）に似ているが總苞片に小さな角状突起があるので区別する。然し筆者はその点よく理解が行かないがそう思って見ると白馬のものは殆んどこれに当るようにも思われるが……とに角小泉氏は白馬特産で独立した種であるとされT. shiroumenseを命名され植物研究雑誌9巻に書かれており、後に北村博士はミヤマタンポポの変種だとされるなど、何れにせよミヤマタンポポとは明らかに区別出来るものらしい。

6 ヒナコゴメグサ

Euphrasia Yabeana NAKAI

山頂尾根すじ到るところに見られるもので、白馬では決して珍らしいものではない。然し白馬のコゴメグサが全てこれに当るのではらいから矢張り注意して見る必要がある。他の高山に多いヒメコゴメグサによく似ているが、それに比べ萼の先きがそり反っているので容易に区別出来る。白馬にはこのほかミヤマコゴメグサ、またこの真疑はとも角本田博士の報告の中にタチコゴメグサもあることになっている。このヒナコゴメグサはコゴメグサ類中最も可憐なもので、矢張り矢部先生の発見によるもの。

7 オオサクラソウ

Primula jesoana MIQUEL var. glabra TAKEDA et HARA

白馬といっても鑓の雪渓周辺に多く見られるもので、花期には誰しもが気づくほどの美しい濃紅色の花をつける葉はモミヂ形で長い柄をもっているので、すぐこれとわかる。始めMIQUEL氏が北海道のものにJesoanaなる学名をつけ1867年に発表されたが、後武田、原兩先生によってこの類には色々変りものがあることが知らされ、その一つに白馬産のものを取り上げ、これをオオサクラソウとし、北海道のものは毛の多いエゾオオサクラソウとされた。従って学名の上のことになるが、もしjesoanaを当てるなら、それは白馬がタイプでなく、これの変種即ち var. glabraを採用すればそのタイプは白馬ということになる。

仲々ややこしいがとに角これも白馬に大いにゆかりがある種である。

8 シロウマウスユキソウ

Leontopodium japonicum MIQUEL var. shiroumensis NAKAI

これも前種同様のいきさつのある種でMIQUEL氏は低山のものも高山のものも同じに扱ったが、後、中井博士によって低山のものと区別するようになった。北アでは広く分布する普通なもので確かに低山のそれに比べ、花の近くの葉は沢山の白い綿毛でおゝわれ、また頭状花の数も少ない。

9 ミヤマキンポウゲ

Ranunculus acris L. var. niponicus HARA

北アルプスではごく普通に見られる種で特記すべきこともないが、始め、１８６１年にRegel氏がR.acris var. Steveniとして Tent.Fl.Ussir. に報告されたものと同じだとしていたが後、原博士によってSteveniでなく日本特産のものとされ、その時のタイプが白馬のものである。

10 タカネキンポウゲ

Ranunculus shinano-alpinus OHWI

前種と同属である本種は矢張り白馬が原産地である。あまり普通には見られず、稀に山頂近くのお花畑中に見る最初アルタイ、蒙古のものと同一視され、後中井博士によりR.altaicus var.minorとして記載されたが、近年大井先生によって変種でなく種として認められた。

11 シロウマオオギ

Astragalus shiroumensis MAKINO

1906年牧野博士が新種として記載されたもの。タイツリオオギ、またリシリオオギに似ているが全体が小形で種子の莢の背面に広い溝があるので区別出来る。あまり多くないが注意して見るとたまたま見つかる。白馬のほか荒川岳、北岳にも知られている。

この他なお数多くの原産種がある。コツガザクラ、シロウマツガザクラ、シロウマオトギリ、ヒメウメバチソウ、ウメハタザオ、ヒナナズナ、レンゲイワヤナギ、シロウマチドリ、シロウマアカバナ、タカネ

タカネキンポウゲ

センブリ、ミヤマハナシノブ、またシロウマヒメスゲ、ホスゲ、タカネナルコスゲ、オニノガリヤスなどみな白馬がTYPEであり、この他白馬が原産ではないが、和名にシロウマの名をもつ、シロウマスゲ、シロウマゼキショウ、シロウマフウロ、シロウマアサツキ等白馬にゆかりの深い植物はけして少なくない。

信州文学碑散歩

（7）

屋代東高等学校教諭　福沢武一

横川家墓碑群＝大町市社区常光寺＝

横川家の檀那寺常光寺は火災で廃滅している。そこで当家のことを知る手がかりは墓碑しかない。

横川家の墓地は清音の滝の峡を出はずれた南側、山足の杉林の中、高さ1メーター半位の整った石碑が並んでいる。

うすら陽のかげれる後も碑のほとりほの明るきは地衣の斑の色

十数基の碑列の裏に小ぶりなる墓石並ぶ童子童女の碑

前列、南から三基目、――これが清音の滝に歌碑を建てた安幸の墓碑。天保13年10日25日没。碑蔭に辞世歌が刻まれる。砂岩の肌。判読に苦しむ。

辞世　わが塚のうへにも雪やつもるらん梢々は花とみつれど　横川弥市右衛門安幸

拓本にし、把握できたところで色々に意味を汲んでみる。――旧10月下旬という季節が雪やつもるらんと歌わしめたように思われる。梢々は花の盛りと見たのは、この世を楽しいものに考え、うきうきしてすごした追憶。その花も直ちに雪に変るところ、世のはかなさを示している。とにかく花と対比される雪は死後の空しさを訴える。けれど、ここからは悲痛感よりも、むしろ美化された世界が立ち現れてくる。それは芸術だけがよくする功徳とでもいおうか。

第五基目の墓碑は、

雪ちるやさらば是から一寝入　横河弥市右衛門安鮮

没年は文化9年。これだけでは確證とならないけれど寛政5年芭蕉句碑を清音の滝に建てた青雅は安鮮その人の俳号であるまいか。もし然りとすれば、死ぬ20年前に句碑を建てたことになる。安幸の先代であることもはっきりする。

さて句意であるが、雪ちるやは自らの落命をちる雪に象徴させている。旧10月4日に没しているところ、自らの死期をもいい当てているようだ。さらに、安幸辞世の雪がこの句に無縁ではない気がする。

一句は暗いものを宿していない。むしろ死をユーモラスにあしらっている。駄酒落に陥ることもない。快的な軽妙さが横溢している。墓地はただでも陰惨。だから、むしろこの明るさこそ望ましい。

隣の碑は、没年が天和4年、享保9年の二代を併記している。

苦むせる碑の文字読むと手をふれぬ弥一右衛門安房と記せる

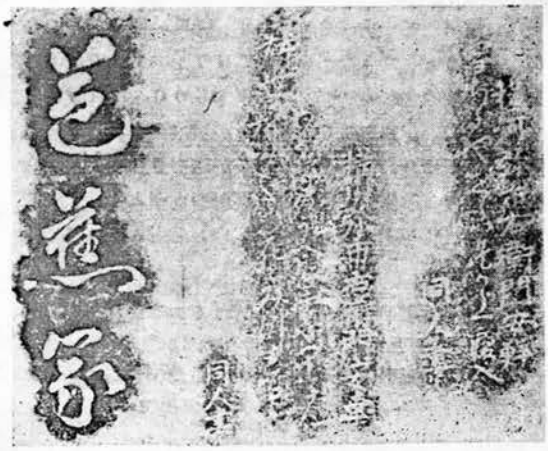
七基目は五輪塔になっている。碑蔭に、――俗名横川茂左衛門安盛　於大阪打死。碑側には、――元和元乙卯年5月7日逝。

この碑は墓地中で最古のもの。しかも、次の代までに70年程とぶ。五輪塔に仕立て、中央に建てているところなども、大阪夏の陣のこの戦死者を、なによりもわが家の祖先として追想していることは確か。徳川勢の忠誠な一員だったことも推定に難くない。

辞世の句も拓本にとり、他の碑もノートにとるうち、あたりはすっかり暮れている。いそいで持物をまとめる落葉をバサバサ踏んで墓地を去る。

北アルプスの山々も、高瀬川沿いの底地も、すっかり夕闇がこめている。そこに光る灯が眼かい。

僕は横川家の盛衰を心に思い浮べながら町の方へ歩いている。横川家以上の豪家はいくらも諸地方に存在したそうした家門の墓地を僕は幾度か目にしてきた。しかし横川家のように歌や句を墓碑に刻むゆかしさを望むことは容易ではない。わけても、その一家があとかたもなく亡んだことがひとしお哀れを催さずにはおかない。



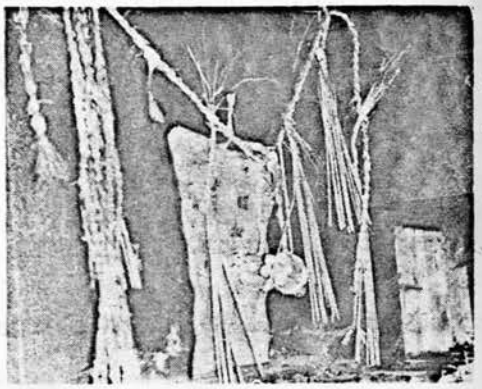
北安曇の民話

鹿　島

大町南高等学校教諭　青　木　　治

大町市から望む山々の中で、最も突元として男性的な偉容を示していて、誰人（たれびと）の目にもとまるのは鹿島槍でありましょう。この鹿島槍を源として南流するのが鹿島川です。渓流の谷口にあるのが、大町市平区鹿島部落で戸数は昔から十一軒で増えもせず減りもせず現在にいたっています。昔はもっと奥のかくれ里に狩や山仕事をして暮していた平家の落人部落だったとのことです。だんだん下って今の土地に本拠をかまへ、鹿島大明神の庇護のもとに暮をたて現在に至ったとのことです。今から約650年前後伏見天皇の時に大阪天王寺宮坂に住んでいた者が、当時戦乱があり世の中が乱れたので一族の者たちが大阪を落ちて、飛弾国志豆之谷（しづのたに）というところに年久（としひさ）しく住んでいました。しかしそこも安定した場所でなかったので、信州稲核（いねこき）谷（今の南安曇郡安曇村）に長途の旅装を解きました。ところが当時はこの地方に賢明のきこえの高かった仁科荘の仁科盛房がこの地方を治めておりました。そこでまたまた一族の者たちはこの盛房君をたより鹿島の地を与えられ、苦心を重ねて現在の地を切り開き田畑をつくり、家を建て士（さむらい）の生活をしていたが、城主盛房のご命令もありなどして後一同は百姓になり、氏神鹿島大明神を祀り現在にいたったという説もあります。

また鹿島大明神の神域は田村将軍以来、南は池尻、小熊峰より天白沢への見通し、北は横山切であり、西はぬけ谷の崖までであり、東は分水に渡る広大な地域で、鹿島百姓は大明神の御山の内は自由に出入の権利があり、諸役が無いことになっています。



鹿島の万物作

日本のはくぶつかん

小石川植物園

植物園の名称は、正しくは東京大学理学部附属植物園と呼ぶのですが、「小石川植物園」といった方が世の人々には親しまれているのです。

日本で最も古い歴史をもっている植物園で、今から２２０余年前貞享元年（１６８４）に、徳川幕府が現在の小石川白山に「小石川御薬園」を設けたのが因で、明治10年（１８７７年）東京大学の所属となって現在におよんでいます。面積は４８７５０坪余りで、園内は台地、傾斜地泉水、樹林などで構成されていて、余年の樹令をもつ喬がうっそうとしてさながらの緑のオアシスであります。園内の植物は主に東アジア産の樹木６００余種（８５科２６０属）と草本数１０００余々が栽培され、温室には熱帯、亜熱帯産の植物１０００余が培養されています。その他園内に植物分類標本園、薬用植物標本園、山地植物植込場、竹類標本園、苗圃等区分した所もあり奥の傾斜地と低地を利用し日本庭園が作られています。台地の一部に本館があり、内に事務室、実験室、図書室、標本室等があります。

植物園の目的は東京大学の教職員や学生が植物学を研究する場所であり、そのために国内や国外の植物を収集栽培しています。とくに顕花植物資料の充実を目的として国内国外の植物園および学者と連絡をとって種子、苗の交換をなし、また、その資料となる種子目録を随時発行しています。また一方植物学に関する知識の普及をはかるため国内一般に公開したり、レクリエーションの場として効果をあげています。ことに小学生や中学生の遠足、見学に適し、年間多くの利用者があります。栃木県日光市に日光分園があります。面積３１６０８坪余。主に高山植物の栽培をしています

（所在地　東京都文京区白山御殿町１０６番地）

お願い　本紙の購読ご希望の方は１カ年購読料170円（郵送料とも）を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あて、ご送金下さい。　大町山岳博物館

山と博物館　第3巻第7号　1958年7月20日発行
発行所　長野県大町市ＴＥＬ（大町）211
大町山岳博物館
印刷所　松本市巾上町 353
信州印刷株式会社